

本当に使える「マイ・イングリッシュ」 —グローバルビジネスに不可欠なツール

京都造形芸術大学 教授
NPO 法人学習学協会 代表理事
本間正人

日本の多くの学校における英語教育の最大の問題点は、「英語教育を受けること、英語を教わること」自体が自己目的化し、「英語を使うこと、英語を使って何かを成し遂げること」が想定されていないことにある。また、英語の試験で高得点をとることが究極の目標になってしまっている。

一方、ビジネスの世界では英語はコミュニケーションのツールにすぎず、英語を自分らしく活用することにより、多様な他者との間に人間関係を構築し、信頼関係へと深め、持続的な Win-Win の関係へと発展させていくことが不可欠なのである。

経済のグローバル化に伴い、「なぜ英語を学ぶことが不可欠なのか」という議論はあちこちでなされている。そもそもドメスティック体質の日本のマスメディアが報道する以上に、ビジネス現場における英語のニーズは高いのである。

資本構成的に「日本企業」と言われている会社でもノン・ジャパニーズ社員が急増しており、競争力の高い会社ほど新規採用人数における人材の国際化は顕著であり、もはや「日本人と外国人」という2項図式では捉えられなくなってきている。本来、多国籍の人が一緒に働くのが当然で、たまたま歴史的に日本の色が濃かったというような職場環境が増えている。そのように人材を広く世界に求め、個々の可能性を引き出し、多様性を尊重して相乗効果を引き出すマネジメントを実現した企業だけが、グローバルな競争力を発揮できるのではないだろうか。

小論では、日本企業の本格的なグローバル化に求められている「本当に使える英語力とは何か」、また「英語コミュニケーション力アップに向けた考え方、取り組み」について、総合的な観点から概観したい。

本当に使える英語力の条件

必要な英語力は「料理」と同じ

かつて、日本社会は、何回も「英会話ブーム」を経験してきた。「英会話」という言葉には、独特の不思議さ、薄っぺらさがついてまわる。つまり、本来の社会的文脈から切り離された、あるいは、文脈依存度のきわめて低いフレーズを人工的なかたちでトレーニングし続けることが英会話のレッスンだったのではないだろうか。

例えば、英会話といえば、お約束の“How are you?”という挨拶のフレーズ。そう言われたら、“I'm fine, thank you.”と判で押ししたように答えるというパターンを学校で暗記させられてきたわけである。しかし、“How are you?”を使うのがふさわしい相手、使わない方がベターな相手もいるはずだ。そんな状況分析について、私たちはどれだけ勉強してきただろうか。

“What's your name?”は失礼だから、“May I have your name?”と質問して、「相手の名前をたずねよ」と書いてある英会話本もたくさんある。しかし、ビジネスの現場では、取引相手の名前は